# 「パパの骨壺」

藤井雅子　（40 代）

私が 22 歳の時、父は脳溢血で亡くなった。倒れてから、意識は戻らなかった。

悲しんでいても葬儀屋さんとの打ち合わせは始まる。私はきちんと準備しておく方が使わずに済んだりするんだから、と母に言われて買っておいた喪服に袖を通していた。法事、告別式、本当にたくさんの人が来てくれて、たくさん父の話をしてくれた。

父はあっという間に骨になってしまった。

最後に骨壺の中に、父が愛用していた腕時計と毎日かけていた眼鏡を入れることになった。私は親戚一同が見守る中、母から眼鏡を受け取るとそっと骨壺の中に入れた。

悲しかった。

なんだかやれることがなくなってしまった気がした。これから、私達家族みんなは真正面から悲しみを受け止めなければいけないんだ。

家に帰って来て居間に置いた骨壺と父の写真。どうしよう、悲しくて悲しくて。うまく母を励ますことすら出来ずにその日は二階の自分の部屋で寝た。

早朝「まあちゃん、どうしよう！」という居間から響いた母の悲鳴で飛び起きた。

何事かと慌てて階段を下りていくと、母が眼鏡を持ちながら、

「パパの眼鏡、間違えて入れちゃった」

話を聞くと、母は朝、新聞を読むために眼鏡をかけた。すると読みにくい。よくよく眼鏡を見ると、手にしているのは父の眼鏡だったのだ。おそらく、骨壺の中には母の眼鏡が入っている。

心底困った顔の母と、父の笑顔の写真を見て、私は思わず声を出して笑ってしまった。

「パパ、新聞読めないって今頃困ってるよ」

「そうよね、そうよね。早く、交換してあげないと」

私は近所に住む兄に連絡をして、すぐに来てもらった。

テーブルの中央に父の骨壺。それを囲む私達。

「開けるよ」「うん」

三人で協力して、閉じたばかりの骨壺を開封した。

朝日が差し込んで、私達を照らした。

骨壺から丁寧に骨を取り除いて新聞紙の上に置いていく。

「今、私達、すごく怪しいよね」「そうだね」

少しして中からは母の眼鏡が出てきた。

「パパさ、これ入れられた時、まあちゃん、違うよ！それママのだよ！って言ったよね、絶対」

「結構、焦っただろうね」

ちゃんと、今度は父の眼鏡を入れた。

そうだ、これだこれ。ずっと使っていたシルバーフレームの眼鏡。手に取ると、父の匂いがした気がした。

三人で元通りにして、もう一度封をした。その時は、もう泣きながら皆で笑っていた。

あの朝が、まぎれもなく最後の家族の時間だった。